

妻籠宿の集落保存の実践を通じた建築文化の振興と過疎地域再生への貢献

小林 俊彦 殿

小林俊彦氏は、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に最初に選定された妻籠宿の保存を半世紀にわたり支えてきた中心人物であり、日本の伝統的な町並み・集落保存を切り開いた先達の一人である。同氏は当初は役場職員として、退職後は町議会議員として、そして現在は「妻籠を愛する会」の理事長として、終始妻籠宿の保存活動を行ってきた。つまり、役場職員、議員、住民という三者の立場で、幅広く保存活動に関わってきたことになる。

明治以降、中山道の宿場としての機能を失った妻籠宿は、昭和30年から40年の初めにかけて深刻な過疎化に直面していた。当時役場の職員であった同氏は、町長の特命を受け妻籠地区の住民の生計手段を講じることを思案し、妻籠地区振興診断に来訪した県企業局長の呟きをヒントにして集落保存を推進することを決意した。当時の妻籠宿には、江戸期から明治期、大正期にかけての伝統的建造物からなる町並みが現存しており、過疎からの脱却のために全国で初めて集落保存に取り組み、妻籠宿とその周辺(旧妻籠村)の民家を含めた田畑、山林、樹木に至るまでの幅広い景観保全に取り組むこととなった。

住民組織として全戸加盟による「妻籠を愛する会」を立ち上げるとともに、「売らない・貸さない・こわさない」を三原則とする「妻籠宿を守る住民憲章」を定めたこと、観光利益を第一にせず地域住民が主体となり文化財としての集落保存を優先する原則を確立したこと、住民、行政、技術者(学者)が適切に役割分担しながら三位一体となっただけでなく、妻籠方式と呼ばれる方式で取り組んだこと、限定された景観とせず宿场景観から在郷景観、自然景観に至るまで総合的に景観保全に取り組んだこと等、いずれも先駆的な試みであり、その後の国内の町並み・集落保存の在り方に影響を与えている。また妻籠観光協会とともに、地域の文化、伝統行事にもスポットをあて、住民が自らボランティアで参加する仕組みをつくりあげた。様々な文化的行事の開催、旧正月、雛祭り、端午の節句、七夕等の伝統行事の継承、板葺き石置き屋根の修復、屋根板の制作などの技能継承も行っている。さらに中山道の道普請、消火設備の維持管理等の水普請も、冬場の「火の用心」の見廻り等のボランティア活動の仕組みとしている。

現在では、妻籠は年間70万人の観光客が国の内外から訪れる観光地となり、国内の訪問者の6割がリピーターであり、1回訪問ただけで終わる観光地とは一線を画している。また国際観光地としての性格も有し、非常に多くの外国の旅行者が馬籠峠を越えて中山道を散策しながら妻籠宿を訪れている。道標や説明板は日本語のみならず、英語、韓国語、中国語(中国、台湾)等の外国語対応を基本として、同氏自身で彫刻し設置している。トイレも洋式化を進め、保存地区の旅館、民宿、食堂等においても外国人に好評である。

このように同氏は、国内には集落保存の思想も制度もない中で、「庶民の生活の証も文化財」と唱え続け、国内の保存の先駆的存在である妻籠宿の保存活動に半世紀にわたり関わり続け、白川村や萩市等とともにその後の「伝統建造物群保存地区制度」の創設に影響を与える等、国内の町並み・集落保存の発展に多大な貢献をし、わが国

の建築文化の向上に大きく貢献している。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。